

第一次世界大戦の文学的消化： カール・クラウス『人類最後の日々』

—(1) プロパガンダ—

藪 前 由 紀

„Ich habe diesen Krieg längst in mir gehabt.“ Paul Klee¹

1. Verarbeitungen des Ersten Weltkrieges

百年戦争，農民戦争，三十年戦争，フランス革命，解放戦争など，人類の歴史を震撼させるような出来事が起きたとき，それを何らかの形で表現しようとする動きが人々の間に生じる．なかでも第一次世界大戦（1914-1918）は，人類史上初の世界大戦であっただけに，人々に与えた衝撃も大きく，それを対象としたさまざまな精神的所産が世に送られた．その表現手段や形式としては，文学作品に限らず，造形芸術や写真，ポスター，絵葉書の挿し絵，日記，書簡，数多くの講演や演説，フィルム，新聞雑誌等の刊行物，種々の記念碑等にまで及び，その数量も測り知れない．内容も好戦的なもの，宣伝的なもの，あるいは反戦，平和主義，戦争の悲惨さ・無意味さを表現したものなど，極めて多彩である．それらはまた展示・展覧という形式で，繰り返し広く公衆の前に提示される．例えば去る1994年夏，ベルリンのアルテス・ムゼーウム（Altes Museum）で開催された展示会（Eine Ausstellung des Deutschen Historischen Museums, Berlin）„Die letzten Tage der Menschheit. Bilder des Ersten Weltkrieges“においても，第一次世界大戦を扱った多くの Bilder が新たに人々の反響を呼んだ．（Vgl., *ibid.*）

このように，枚挙にいとまがないほどの制作品を生み出したことは，第一次大戦の衝撃の大きさだけでなく，この大戦という戦争体験・経験の

深さをも意味しよう。あるいは一般に、個人がその体験にいかに関わったか、いかに拘わり続けたかを示唆するものと言えよう。

ところで国家間の政治・外交上の論争が、第一次大戦勃発の諸要因や、Kriegsschuld を問い、諸事実の信憑性、各々の行為の合法性を争うのに対し、個人の体験はそのような、いわば客観的正当性の尺度を超えて、作品の中に表現される。そこでは、第一次大戦が美学的テーマとしてどのように消化 (Verarbeitung) されているかに、個人の戦争体験に対するさまざまな解釈・判断が表出する。上記、アルテス・ムゼウム の Bilder の展覧会が、今も一般公衆の関心を引いて止まない理由の一つも、第一次世界大戦——最初の世界大戦——の精神的・美学的消化 (の仕方) が、絶えず後世のわれわれにも考慮すべき問題を投げかけるからであろう。

さて一口に第一次大戦の美学的消化、大戦の解釈といっても、これもまた、さまざまな要素によって影響を受け、規定される。例えば、作品における大戦の「現実設定」は、客観的意味でも主観的意味でも、作品によって非常にまちまちなので、多種多様な動機や問題もまた、その描出表現に勢いあらわれてくるのである。

クラウス・フォンドゥング (Klaus Vondung) は、このような第一次世界大戦のさまざまな解釈について、「第一次世界大戦の 黙示録的解釈」² (apokalyptische Deutungen des Ersten Weltkriegs) という視点から論究している。彼に従えば、第一次世界大戦のさまざまな黙示録的解釈は、まず言うまでもなく、戦争という経験が解釈の土台となるが、それだけではない。「個人的、伝記的、社会的、経済的、政治的所与が、その都度現に絡み合うような、具体的な歴史的状況の中で生じたさまざまな経験もまた、その解釈に入り込むのである。そのような所与には、社会や歴史に固有の、それぞれ特殊な象徴解釈の伝統も含まれるであろう。」(ibid., S. 87)

われわれはここでフォンドゥングの持論を、一般に、第一次大戦の解釈 (の仕方) に広げて考察することが許されよう。つまり第一次大戦が美学的テーマとしていかに精神的所産へ消化されたかは、まず第一に作者の戦争体験・経験が主たる動機となるが、その経験の解釈には、個人的なものであれ、社会的なものであれ、あるいは意識的であれ、無意識にであれ、

作者自身の所与における作者のさまざまな経験も共作用する。従って第一次大戦の解釈（の仕方）は、同時に作者の背景となる経験世界をも反映しよう。そのような視点に立つ学術研究書『戦争体験』（*Kriegserlebnis*）（*ibid.*）の中では、第一次世界大戦という世界共通の出来事の体験——未だかつて世界が体験したことのない体験——が、イギリス、ドイツ、フランス、オーストリア、ハンガリー、南スラヴ民族諸国、イタリア、アメリカ合衆国、ロシア等の国々で、どのように解釈・判断されたかが論究されている。そして全容を比較・分析すれば、そこから生じる各国・各国民間のさまざまな解釈・判断の相似・相違点を究明することによって、各国の当時の社会独特の意味解釈や、各国の個人に特徴的な経験の解釈（の仕方）が明らかになる。このような特殊性にはまた、その時代の各国・各国民に固有の現象を窺い知ることもできよう。

ここで前もって述べておけば、この小論の関心は、第一次世界大戦の解釈、第一次世界大戦のテーマ化に表出する当時の社会独特の現象に方向づけられるとする。そして小論で取り上げるカール・クラウス（Karl Kraus 1874-1936）のドラマ『人類最後の日々』（*Die letzten Tage der Menschheit*）において、クラウスが第一次大戦のさまざまな解釈や、そのような解釈が生じる社会現象といかに対決し、そのクラウス自身が第一次大戦をどのように解釈し、判断したかを考察することを目的とする。その結果、この膨大な作品の特異性を明らかにしたいと思うのである。

2. カール・クラウスと Propaganda

『人類最後の日々』の場面の草稿の大部分は、作者カール・クラウスによって、1915年から1917年にかけて既に執筆されていた。作品の序幕が書かれたのは1915年6月、エピローグが著されたのは1917年7月である。その後更に多くの箇所補充と修正が加えられ、全体が書き下ろされたのは1919年のことである。序幕と第5幕のいずれの第1場も、当時のオーストリア＝ハンガリー帝国の帝都、ウィーンのシルク・エッケという街角のシーンから始まるこの作品は、第一次世界大戦の最中に、まさにその大戦という「時事」テーマを扱ったドラマである。作品の創作に際し、ドキュメンタリーな要素を「引用」し、駆使したことは、クラウス自身が作品冒頭

の端書きで次のように記している。既に有名な言葉ではあるが、われわれはこのクラウスの言葉を後々まで常に念頭に置く必要がある。原文のまま少し引用する。

„Die unwahrscheinlichsten Taten, die hier gemeldet werden, sind wirklich geschehen; ich habe gemalt, was sie nur taten. Die unwahrscheinlichsten Gespräche, die hier geführt werden, sind wörtlich gesprochen worden; die grellsten Erfindungen sind Zitate. Sätze, deren Wahnwitz unverlierbar dem Ohr eingeschrieben ist, wachsen zur Lebensmusik. Das Dokument ist Figur; Berichte erstehen als Gestalten, Gestalten verenden als Leitartikel; das Feuilleton bekam einen Mund, der es monologisch von sich gibt; Phrasen stehen auf zwei Beinen—Menschen behielten nur eines. (W. 9.)

『人類最後の日々』の作品全体は、第一次世界大戦当時のさまざまな新聞記事や寄稿文の「引用」、講演などを並列した「モンタージュ技法」で構成されている。このような手法も、クラウスによる第一次大戦の美学的処理の現われとして、小論の考察には十分に価するのであるが、これに関しては次回に取り上げることにして、小論ではまず、プロパガンダに取り組むことにする。

第一次世界大戦をテーマに取り組んだ多数の所産のうち、最も容易にわれわれの関心事になるのは、大戦あるいは「参戦」のための宣伝活動——プロパガンダである。というのも、宣伝活動として制作された作品は、一般に目的指向がある故、そこに表れた大戦の解釈もこれに大きく依存するからである。第一次大戦の解釈と社会の関連に着目する今、宣伝目的と大戦の解釈というコンテキストからも、いっそう明瞭に当時の社会の現象を把握することが可能と思われる。カール・クラウスは当時の宣伝活動をどのように描出しているか。作品に則して、ドラマの場面よりわれわれは二つの異なる例を見ることにする。

まず、プロパガンダの最も顕著な例として挙げられるのは、第一次大戦

中、戦線や軍事基地で執筆された知識人や作家たちによる新聞記事や寄稿文、多数の兵士や国民を前にとり行なわれた著名人たちによる数々の講演や演説であろう。『人類最後の日々』の中でも、このような宣伝活動が描き出されている。ハンス・ミュラー (Hans Müller 1882-1952)、ローダ・ローダ (Roda Roda 本名 Sandor Friedrich Rosenfeld 1872-1945)、アリス・シャレク (Alice Schalek 1874-1956)、ルートヴィヒ・ガングホーファー (Ludwig Ganghofer 1855-1920)、そして文豪フーゴー・フォン・ホフマンスタール (Hugo von Hofmannsthal 1874-1924) といった作家たちや、司教であり詩人でもあったオトカル・ケルソシュトック (Ottokar Kernstock 1848-1928) やブルーダー・ヴィラム (Bruder Willam 本名 Anton Müller 1870-1939) など、実在した人物による大戦中の宣伝活動が作品の随所で風刺的に描かれている。例えば第1幕第23場では、詩人ガングホーファーと皇帝という「共に人類の頂点に立つ者たち」(W. 170.) の戦場における会見シーンが描かれている。そこではガングホーファーが、戦線の題材をもとに世に俗うけするような原稿を書き上げ、皇帝の前で披露する様子が、彼の粗野で武骨な所作を風刺した場面仕立てと共に描かれている。(vgl. W. 167ff.) あるいは作品第3幕では、一連の教会聖職者たち——大教区監督ファルケ、宗教局評定官ラーベ、司祭ガイアー、教会守などの熱狂的愛国的講演のシーンが見られる。少し引用する。

第15場

あるプロテスタント教会。

大教区監督ファルケ：——この戦争は、神より諸民族の罪に対して下しおかれた一つの罰であり、われわれドイツ人は同盟国の人々と共に、神の判定を執行する執行人なのです。この神の国が、この戦争によって大きく振興し、深化することには疑いの余地がありません。イエスは「汝の敵を愛せよ」という戒めを、ただ個人個人の人間交際のために賜ったのです。民族間のためにはありません。(W. 355.)

第16場

別のプロテスタント教会。

宗教局評定官ラーベ：……戦争とは最高理性であり、他のいかなる手段を行使しても神の御意志に叶わぬとき、諸民族を力でもって理性に引き戻すための神の最後の手段であります。戦争は世界史における神の審判であり神の判決であります。(W. 356.)

こうして高位の聖職者たちによって、ドイツ並びにその同盟国の国民は、自らが神になり代わり、戦争を通じて他の諸民族を裁く役目を授かったものと吹聴されたのである。加えて司祭ガイアーの説教には次のような節がある。

Wir sind einmal Henkersknechte,
Gott hat selbst uns ausgewählt! (W.359.)

一般に、彼らの宣伝活動の目指すところは、自国の兵士や国民の愛国心を昂揚し、第一次世界大戦を称揚することにある。実際、第一次世界大戦中、ドイツ並びに同盟国では、各地で知識人や著名人による愛国的講演が盛んに繰り広げられた。哲学者であり、ノーベル賞受賞者でもあったルードルフ・オイケン (Rudolf Eucken 1846-1926) は、大戦勃発後の最初の1年は、ドイツ各地や戦場の兵士たちを前に、毎週少なくとも2回は進んで講演を行った。他にも、作家エドゥアルト・シュトゥッケン (Eduard Stucken 1865-1936) がドイツ国民を「最後の審判の騎士」と見立てたなら、同じく作家ヴェルター・フレックス (Walter Flex 1887-1917) は、神をしてドイツ皇帝の手に裁きの剣を握らせ、司教ルートヴィヒ・シュネラー (Ludwig Schneller) に至っては、「神の摂理がこの度、われわれをお使いになったのは、われらの敵に対して最後の審判を執行させるためである」と断言し、ドイツ国民にその使命感を植え付けたのである³。

以上の例は、言うなればそれ自体で明白なプロパガンダの例である。つまり制作者 (例えば講演者) の目的と、その作品 (例えば講演) が社会や組織の中で果たす機能が一致する場合の宣伝活動である。一方、それとは異なり、制作者の意図とは無関係にその作品が宣伝活動へと利用・操作される場合も考えられる。われわれが対象とする『人類最後の日々』に再び

例を取るなら、作品第2幕第13場で、2人の年金生活中の宮廷顧問官がゲーテの『旅人の夜の歌』（*Wanderers Nachtlied*）をパロディ化して、『旅人の戦場の歌』（*Wanderers Schlachtlied*）という新聞投稿用の詩を作り、朗読し合うシーンがある。その一つを原文どおり引用する。

Also über allen Gipfeln ist Ruh.
Über allen Wipfeln spürest du
Kaum einen Hauch.
Der Hindenburg schlafet im Walde,
Warte nur balde
Fällt Warschau auch. (W. 266.)

こうして（第一次大戦のドイツの参謀総長）ヒンデンプルクが休んでいる間にも、ワルシャワも陥落すると歌われている。

ドラマ全体からするとこれは非常に小さな場面ではあるが、カール・クラウスが宣伝活動の本質を鋭く捉えていることがよく窺える。すなわち、おそらくは同盟国側の国民の心に浸透したゲーテの1篇のドイツ詩が、愛国的な *Parodie*（替え歌）に変えられる。このゲーテの詩自体が有名で、詩語も簡単かつ語数も少ない故（覚えやすいとも言える）、国民の間で発揮する宣伝的效果もまた、恰も一つの「流行歌」のごとく抜群と考えられるのである。

ごく簡単にではあるが、われわれは、カール・クラウスが第一次世界大戦へのプロパガンダを、自発的・意識的な宣伝活動の場合と、宣伝活動へと操作される場合の双方から描出していることを見てきた。とりわけ後者からは、筆者クラウスが、プロパガンダを先導する側の知識人や著名人や文筆家の動きに止まらず、宣伝活動によって操作される側の社会の現象にも切り込んでいることが窺い知れよう。当時の社会状況における宣伝活動の中で、クラウスは根本的にプロパガンダとどう対決したのか。それを理解するためには、原点のプロパガンダに立ち戻って考えてみるのも無益ではないと思われる。

プロパガンダは、愛国心を昂揚した講演や演説にせよ、あるいはプロパガンダとは元来全く無関係に成立しながら、いつしかプロパガンダとしての機能を果たす結果になった文学作品や造形芸術にせよ、その内容が時代や社会の中で目覚ましい宣伝的效果をあげるような、そのような機能と関連していたことがまずは前提となろう。

フォンドゥングは、プロパガンダに関して、どのような内容が宣伝活動と結びついたか、あるいは連携する傾向にあったかという問題に対して、アメリカの *Kommunikationswissenschaft* の創始者の一人、ハーロルド・D・ラスウェル (Harold D. Lasswell) によるプロパガンダの定義づけを援用している。それによると、戦争状態にある一国のプロパガンダの重要な機能は、さまざまな目的に従って以下のように分類される。

- 1) 戦闘力並びに粘りを促進するため、自国の国民の心を一つにし、国民を道徳的に強化しなければならない。
- 2) 同盟国側からの盟約への忠誠を保持するため、同盟国との友好関係に留意しなければならない。
- 3) 中立国を自国側に引き寄せなければならない。もしくは、少なくとも中立国に中立的態度を強めさせなければならない。
- 4) 敵国を道徳的に退廃させ、連合国間に不信感を植え付けなければならない⁴。

更にフォンドゥングが付言することには、「敵国を悪玉に仕立てあげること (*Verteufelung*) は、結局のところ次の点で有効である。つまり中立国における敵国の信頼を失わせ、とりわけ自国の国民の間に憎悪を呼び起こし、その感情を絶えず抱き続けさせ、そしてこの憎悪感情のうちに国民を一体化させるのに役立つのである。」(Ibid., S. 16.)

これに従って考察すると、例えば一般にプロパガンダとして「愛国心を昂揚する」制作品を挙げたとしても、それが上掲の諸機能のうちのどの機能を満たしたかによって微妙に差異が生じるように思われる。しかし今一度検討してみるなら、これらの機能は「国民の心を一つにする」、「同盟国との友好関係に留意する」、「中立国を自国側に引き寄せる」、あるいは敵国(連合国)間に「不信感を植え付け」、敵国の信頼関係を悪化させるなどで、自国の国民や同盟国間を一つにする、いわば統一化、一体化という

機能に概ね集約されるであろう。

今われわれは、上掲の第一次大戦へのプロパガンダの機能に関して、プロパガンダの内容が時代や社会状況において、宣伝効果を発揮する機能という方向から考察の端緒を見出だしたのであるが、視点を変えて、次のことも考究する必要がある。すなわち、プロパガンダの機能が機能として、如何に、あるいは何故、当時の社会の中で作用したのか——やや極端な表現を用いれば、何故、当時の社会においてそれ程うまく機能したのであるか。フォンドゥングが述べることには、「予め然るべくさまざまな素因 (Prädispositionen) がなければ、プロパガンダが何か意見を作り出したたりすることは、あり得ないのである。プロパガンダは、人間に根づいたさまざまな心的態度や偏見に依存し、せいぜいのところ、これらのある方向に誘導したり、先鋭化したり、機能化したり (funktionalisieren) するだけである。」(ibid.) プロパガンダの機能が実際に機能として働く、第一次大戦当時の社会のさまざまな素因が、複線的に問われる必要がある。

論が先走りしてしまったので、カール・クラウスの場合に立ち返ろう。『人類最後の日々』からわれわれは、第一次世界大戦への宣伝活動の相異なる二つの例を見てきた。一連の聖職者たちの講演場面では、ドイツ並びに同監国が大戦によって他国を裁くという「使命」がうたわれている。概してこのような場面に描出されているのは、愛国心を昂揚するための宣伝活動のみならず、第一次世界大戦に何らかの意味を付与しようとする社会の動きである。

更に少し作品を見てみよう。このドラマでは5幕全体を通じて、楽天家 (Optimist) と、クラウス自身の分身、不平家 (Nörgler) が登場し、対話を繰り返すシーンが現われるが、そのうち作品第2幕第10場には次のような2人の対話がある。

楽天家：しかしなんだかんだ言っても例外があるはずでしょう。たとえば文学です、祖国は兵士だけではなく——

不平家：叙情詩人をも必要とするのです。兵士たち自身が持っていない勇気を鼓吹すべき詩人をも。

楽天家：詩人とは、より高度な目的とともに、たしかに成長した者のことですよ。戦争がまた、彼らを鋼鉄のように鍛えたということ
を彼らも否定できませんよ。 (W. 249ff.)

ここでも、不平家によって、兵士たちに平生なら持ち得ない勇気を奮い立たせるといふ詩人の活動が話題に持ち出される一方、楽天家によって、その詩人にとっても、戦争がより高度な目的とともに彼らを鍛えたのだという、戦争の「意味づけ」が施されている。

論旨がまた前後してしまいが、先にわれわれは、第一次世界大戦のプロパガンダの内容とその宣伝活動の機能との関連から、宣伝活動の機能が概ね、「統一化、一体化」という機能につづめられることを見出だした。換言すれば、さまざまな機能の背後には、このような「統一化、一体化」といふ社会の動きがあるとも見做せよう。ここでわれわれは、言葉の概念の上で、プロパガンダの「内容」を「第一次世界大戦の解釈」と置き換えても差し支えないと思われる。そうすればプロパガンダの「内容」と「機能」との関連は、「第一次世界大戦の解釈」と「機能」、すなわち「統一化、一体化」という機能の関連の上に据え直される。

クラウスの『人類最後の日々』から取り上げた2番目のパターン、『旅人の夜の歌』のパロディの場合、祖国ドイツの文豪ゲーテの詩は、一つの歌となり、ドイツ国民の「心を一にする」作用があると受け取れる。

以上、『人類最後の日々』における第一次世界大戦への宣伝活動の場面では、その大戦の解釈として、戦争への「意味づけ」が描出されていることが明らかになった。そのような意味付与はまた、プロパガンダの「統一化、一体化」という機能と密接な関連を持ち得る。カール・クラウスが、ドラマの宣伝活動の場面において描出しているのは、この大戦への「意味づけ」と国民の「統一化、一体化」の関連現象であると思われる。第一次世界大戦の「意味づけ」を培養・促進し、社会の「統一化、一体化」を方向づけようとする操作者を描出する一方、クラウスは、そのような機能が機能する社会の素因とも対決するのである。つまり大戦に「意味」を見出だそうとし、「一体化」される態勢を受け入れる社会現象、そのようなプロパガンダをいわば必要とする社会の病理を描き出したのである。

当然ながら、われわれはこの社会状況を論究する必要があるが、小論では、第一次大戦へのプロパガンダに関し、その宣伝活動における大戦の解釈とその解釈が生じる背景、それをクラウス自身がまたいかに解釈し、作品に描出したかという問題に対して、ただアウトラインを明瞭にするだけに止める。このテーマは、次の Presse とカール・クラウスという更に大きな問題を扱う際にいっそう深化することにする。

プロパガンダの概念に対し、フォンドゥングは、第一次世界大戦というテーマを消化した文学・芸術作品の多くは、プロパガンダとしての機能に形成し得る内容とは全く他の内容を示していること、内容的には公式のプロパガンダに相当するさまざまな作品にも、しばしば、そのような内容や宣伝的機能には納まり切らないさまざまな次元が認められること、そして第一次世界大戦中及び大戦後、戦争の産物として世に現われた制作品は、副次的にプロパガンダとして機能化される可能性があったにせよ、元来は「意味」を見出だすという動機から、制作されたものであることを指摘する。(vgl. *ibid.*, S. 17.)

「プロパガンダか、意味解釈か？」(Ibid.) という問に対し、カール・クラウスの場合にはしかし「プロパガンダが意味解釈」であるといえよう。宣伝活動が第一次世界大戦の「意味づけ」を助長・操作し、それが社会の中で「一体化」という機能を果たす。それほどに大々的な宣伝活動を繰り広げ、「意味づけ」を操作し、クラウスの生涯の批判的となったのが、当時の報道界 Presse であった。われわれは次にカール・クラウスと Presse に関する考察に取り組みたい。(続く)

テ ク ス ト

Karl Kraus: *Die letzten Tage der Menschheit*. Werke v. K. Kraus. Hrsg. v. Heinrich Fischer. München 2. Aufl. 1957. (Originalfassung 1926.)

テキストからの引用は、本文中に略記号Wとページ数で示した。本文中のテキストからの引用箇所は邦訳は筆者が訳出したが、その際、法政大学出版局『人類最後の日々』(カール・クラウス著作集9)(池内紀訳)を参照させていただいた。

注

- 1 Hans Jürgen Papias: »Ich habe diesen Krieg in mir längst gehabt«

- Paul Klee. In: Rainer Rother (Hrsg.): *Katalog einer Ausstellung des Deutschen Museums*, Berlin 1994.
- 2 Vgl. Klaus Vondung: Zum internationalen und gesellschaftlichen Kontext apokalyptischer Deutungen des Ersten Weltkriegs. In: K. Vondung (Hrsg.): *Kriegserlebnis*, Göttingen 1980. S. 85ff.
 - 3 Vgl. Klaus Vondung: Geschichte als Weltgericht. Genesis und Degradation einer Symbolik. *Ibid.*, S. 63ff.
 - 4 Klaus Vondung: Propaganda oder Sinndetung? *Ibid.*, S. 15.

主要参考文献

- Klaus Vondung: *Die Apokalypse in Deutschland*, Göttingen, 1988.
- Weltkriege in Literatur und Film. In: *Zeitschrift für Literaturwissenschaft und Linguistik*. H. 75. Göttingen 1990.
- Kurt Krolop: *Sprachsatire als Zeitsatire bei Karl Kraus*, Berlin 1987.
- Michael Gollbach: *Die Wiederkehr des Weltkrieges in der Literatur*, Kronberg/Ts. 1978.
- Hans Peter Bayerdörfer u. a. (Hrsg.): *Literatur und Theater im Wilhelminischen Zeitalter*, Tübingen 1978.
- Jens Malte Fischer: *Karl Kraus*, Stuttgart 1974.
- Nobert Ruske: *Szenische Realität und historische Wirklichkeit. Eine Untersuchung zu Karl Kraus: „Die letzten Tage der Menschheit“*, Frankfurt a. M. 1981.
- Kraus-Heft*, München.

Zur literarischen Verarbeitung des Ersten
Weltkrieges. Karl Kraus: *Die letzten
Tage der Menschheit*

—(1) Propaganda—

Yuki YABUMAE

Während des Ersten Weltkrieges und nach dessen Ende entstanden viele Werke der Literatur und bildenden Kunst, neben Plakaten, Filmen, Tagebüchern Briefen usw., die sich auf den „ersten“ Weltkrieg der Menschheitsgeschichte beziehen. Aus diesen Verarbeitungen des Krieges läßt sich ersehen, wie er interpretiert wird und wie die individuellen Kriegserfahrungen artikuliert werden. Auch wenn die Urheber primär durch das Kriegserlebnis motiviert wurden, wirkten doch immer auch andere Erfahrungen auf sie ein, die sich jeweils aus der historischen, sozialen und individuellen Situation ergaben. An diesen Verarbeitungen des Krieges zeigen sich also verschiedenartige individuell, gesellschaftlich und geschichtlich spezifische Deutungen des Ersten Weltkrieges. Es ist von wissenschaftlichem Interesse, das jeweils Besondere in seiner Bedingtheit zu erforschen.

Dementsprechend untersuche ich eines der bedeutendsten literarischen Ergebnisse des Ersten Weltkrieges: „*Die letzten Tage der Menschheit*“ von Karl Kraus; als Ansatz dazu behandle ich im vorliegenden Aufsatz die Kriegspropaganda als kritisch behandelten Gegenstand des Werkes und als Ausdruck der gesellschaftlichen Situation.

Kraus zitiert in manchen Szenen des Dramas damalige propagandistische Texte, die von Intellektuellen, z. B. Schriftstellern

und Pfarrern, öffentlich vorgetragen wurden. Er zeigt auch, wie ein literarisches Werk, das vom Autor ursprünglich ohne Zusammenhänge mit propagandistischen Zwecken verfaßt wurde, während des Krieges eine propagandistische Funktion erfüllen kann.

Kraus porträtiert dadurch auch die Gesellschaft der Zeit, in der die Keime vorhanden sind, die propagandistische Funktionalisierung verursachen und fördern.

Die Inhalte der propagandistischen Texte sind abhängig von den gesellschaftlichen Umständen, in denen sie eine wichtige Rolle spielen. Diese propagandistischen Inhalte können unterschiedliche Funktionen erfüllen, aber eine Hauptfunktion ist, eine „Einheit“ der Nation herbeizuführen und zu sichern.

Die literarischen Erzeugnisse können auch als „Interpretationen des Krieges“ betrachtet werden. Wie man an Aussagen des ‚Optimisten‘ des Dramas ablesen kann, versuchen die propagandistischen Texte, dem Krieg einen Sinn zu geben.

Kraus stellt nicht nur die Produkte von Kriegspropagandisten kritisch vor, sondern zeigt auch Zusammenhänge zwischen diesen Produkten und denjenigen gesellschaftlichen Kräften der Kriegszeit auf, die im Kriegserlebnis und seiner angeblichen Sinnhaftigkeit einen Faktor der nationalen „Einigkeit“ sehen und deshalb die Tendenzen der Kriegspropaganda bejahen.